

令和6年度 学校教育相談研修活動報告

実施日時 令和6年11月1日(金) 14:00~16:00 (講演14:15~)

会場 静岡大成高校 大会議室

講演 「“安心感”を真ん中にした学校生活を目指して
—アタッチメント(愛着)の視点から—」

講師 静岡福祉大学 子ども学科 准教授 上野永子 氏

講演内容

□事例(休みがちな生徒への対応について方針等を考えてみる)

□子どもの心理社会的発達

乳児期(0~1歳)・幼児期 前期・後期・学童期・ギャングエイジ・思春期・青年期に分け、それぞれの特性を踏まえた接し方を把握する。

○乳児期(0~1歳)・幼児期 前期・後期

- ・目的を持った遊びができるようになる。将来に何になりたい?に答える。
- ・しつけ から モラル・ルールを教える時期(この時期に教えることの大切さ)。
- ・性別の自覚が芽生える(LGBTQ) 男のだから 女の子だから は不適切。

○学童期(6~12歳)

- ・もともと落ち着いた時期 学ぶことに対して積極的⇔劣等感にもさらされる時期。
- ・何が苦手で何が得意なのかの自覚 が 有能感を感じることにつながる。
- ・何に対して有能感を抱いているのかを知ることが大事。
- ・おちついて学べる場所を持つことで安心感を持つ。

○ギャングエイジ

- ・小集団・・・大人の嫌がることをやりたがる時期。
- ・ギャングエイジは自立の準備でもある。
- ・似たもの同士で小集団を作る。ここに似てないものが入ると外された子が孤立感を持つ。
- ・「あなたに問題があって 外されたのではない」ということを伝える。
- ・ほかにもあなたの居場所はあることを伝える。

○思春期・青年期・12歳から20歳頃

- ・重要な他者は 養育者や教師 よりも「友人」。
- ・ぼっち である自分が イヤ この心情に寄り添う。
- ・大人が友人関係に介入できない が、介入することは求められる。この難しさの中で・・・「どんな集団を作っていくか」「助け合える集団・わかってくれる他者の存在」が重要になる。

〈子どもの脳の働き〉

この時期の子どもは物事を理性的に判断することができない 理性よりも 欲望・不安・恐怖。

個人差はあるが、大人が制限をかけることも重要。

例:ADHD の子どもは、刺激を求めることがあり、「ゲーム好き」が多く、ゲーム障害につながることも。

このことを 踏まえて 接すること。

*発達段階に応じて、周囲の大人のかかわり方も変わってくる。

□アタッチメントについて

○アタッチメントとは

危険・恐怖・不安・困難といった一人では回復できない否定的な感情を感じたときに、誰かにくっついて、「安心したい」もしくは、「慰めてほしい」という欲求で、実際にくっこうとすること。(心理学の定義)
大人がこの定義を適切に理解し応じることで、安定したアタッチメントが形成される。

例: 転んだ時

養育者に助けをもらってまた遊ぶ この繰り返しで発達していく。

○ストレンジ・シチュエーション法(SSP)～母子の分離・再会場面を観察する方法～

以下の三つに分けられる

「回避型」(子供のニーズに対して拒否的にふるまう)

「安定型」(子供のニーズに対して敏感に応答する)約6割が安定型

「両価型」(子供のニーズに対して一貫性に欠く応答をする)

安心感が欲しいのは (動物的な)本能。

回避型・・・子どものころ、自分のニーズを拒否された経験を積み重ねた子どもである可能性があり、助けを求めることが苦手であることが予想される。

→教育現場で活かすならば、助けを求めづらい生徒には、ある程度教師側が声をかけていく必要があるが、侵襲的にならない必要がある。普段からの信頼関係が大事。

両価型・・・子どもころ、自分のニーズに対して一貫しない養育が積み重なった可能性があり、応じてもらえるかどうか不安なために、過剰にサインを出しているのではないかと考えられている。

→教育現場で活かすなら、教師は一貫してアタッチメントニーズに態度をとることが必要。

○アタッチメントの質の違いがもたらすもの

安定型の子どもは 困ったときに「助けて」を言える・・・自分は愛されている。他人は信用できる。

不安定型の子ども 困ったときに「助けて」を言えない・・・自分は愛されていない。他人は信用できない。

*学校では先生が アタッチメントの対象になる。

アタッチメント欲求は生涯にわたる！ 「安心」している環境をつくること。

「安心」できるから学習等に取り組める。

○安定したアタッチメントを形成するかかわり

共感と安心感 共感＝言葉にする

□トラウマや ACEs研究について

○逆境的小児期体験(ACEs)・・・心理的・身体的性的な虐待、ネグレクト、親の別居や離婚等メンタルのみならずフィジカル面の健康にも影響がある。

○逆境的小児期体験(ACEs)が及ぼす影響のメカニズム
脳が戦闘態勢になる・・・脳へのダメージにつながる。

○逆境的小児期体験(ACEs)の影響

神経発達系や免疫系に障害をもたらす、慢性的な身体疾患や精神健康上の問題を引き起こす。
トラウマへの注目、トラウマ・インフォームド・ケアが必要。

いじめ がメンタルヘルスに関連していく。

ACEs 研究が示しているのは、ネガティブな経験をすればするほど 人は弱くなる！ということ。
イヤな経験 を助けてくれた他者がいることで強くなることはできる。

いじめたり いじめられたりしながら 強くなる という昭和の考え方は間違っている！

□「安心感」を真ん中にした教育現場

○いじめ被害者に必要なケア①、②

安心感が得られること＝いじめに対する対応についてともに探索する。

○アタッチメント(愛着)で考える

「安心感」を与えることが第一である。「あなたが悪かった」はNG

『あなたは悪くない』というアプローチが必要になる。

○アタッチメントで保護者が学校に対して攻撃的になる時を考える

攻撃的な保護者の裏にはアタッチメント欲求(共感と安心感が欲しい)

共感と安心感を与えた後でなければ 探索行動(考えること)はできない。

○暴言虐待の脳への影響

小児期から暴言虐待を受けた男女の脳画像を調べた結果、聴覚野の発達に影響を与える「ことが推察された。

○体罰・不適切な言動の根絶に向けて

“ふじのくに”の未来を担う「有徳の人」づくりのために を参照。

○キーワードは安心感

甘えさせると安心感を与えるのは似ているようで違う。安心感は本能である。

「依存」はできることをやらない。「アタッチメン」トは、一人では回復できない気持ちを落ち着かせることを手伝ってほしいというニーズに応じる。

子どものニーズに応じるのがアタッチメント(愛着)

「子どもに〇〇をやらせる」のは愛情ではあるが アタッチメントの本質とは違う。

愛情と愛着の違い を保護者にも理解させること は大切。

どうすることが 安心感につながるのか を常に考えてみる。

最初に考えてみた事例について、もう一度考えて最初に考えたアプローチと比較してみる。

□質疑応答

Q.いじめを訴えてきた生徒(保護者)に寄り添うことも大事だが、加害者とされた生徒にはいじめという意識はないケースがある。どのような対応が望ましいかを助言があれば教えていただきたい。

A.当たり前のことであるが、訴えてきた生徒へ寄り添うこと、安心感をあたえる対応は必須である。一方で加害者とされた生徒の声もしっかり聴く(寄り添う)ことも重要になるが、難しいケースである。

Q.同様なケースで、両者の話に耳を傾けていると、結果的に両者から信頼されない状態が生じるが・・・。

A.これも難しいケースだが現場では起こりうること。教員側がチームで取り組むことも一つの方法なのである。

Q. 本日伺った講演内容は大変参考になるが、現場ではこの質問のように、対処の難しい事象がしばしば起きる。機会があれば、事例検討をする場を設けていただくと嬉しい。

A. 今後、研修内容を検討するうえでの参考とさせていただきます。(専門部会より回答)

記録:杉山広美(静岡大成高等学校)

